

かぐわしいとき

小学生のころ、自販機一台、本一冊ない小さな村に暮らした  
まるで一枚の葉が、風にのり舞いこんだかのように

薄紫一面のれんげ草の間を駆けまわった

山道の奥にはとろけるように甘い湧き水

真夏の川はきんきんに冷たく、岩の上に体をひろげた  
相棒はぴよぴよこはねる雨蛙

木に登り柿をかじれば、その渋さをしる

夕暮れの橋から見上げれば、空いっぱい赤とんぼ

やがてその空に白い雪虫がふわふわ舞う

朝にきらめく霜柱 踏んでみればしやりしやりわらう

かじかむ手は焚火の炎があたためてくれた

バスも灯もない夜道は満天の星がつきそってくれた

子守歌はいつも遠い小川のせせらぎだった

瞳をとじれば、色満ちあふれ

この手には、あのとまのまま残るあたたかさ

それは、わたしが一葉だったときの小さな宇宙

今も深い奥から立ちのぼる かぐわしいとき